

詩篇37篇1-7節 「静かで、平安な道」

1A 「腹を立てるな」

2A 「善を行なえ」

3A 「主を己の喜びとせよ」

4A 「道を主に委ねよ」

5A 「主の前に静まれ」

本文

私たちは、今、交読文で読んだ 37 篇 1-11 節までの、1-7 節に注目して読んでいきたいと思えます。午後は 35 篇から 37 篇まで見ていきます。

しばしば私たちは、「古き良き時代」を懐かしがります。今の世の中を見ていて昔はそうでなかったという前提で嘆くことが多いです。けれども実は、昔も今も変わらず悪いことは起きていました。ストレスや閉塞感の問題は現代に始まった話ではありません。それを生々しく教えてくれるのが、聖書です。ダビデほど、ストレスに満ちた生活を送った人はいませんでした。謂れのない中傷を受けて、物理的に生命の危害を受けそうになっていました。その彼の詩歌を読みますと、まるで私たち現代社会に生きている者たちが、通っているところと変わりません。

私たちがその一部を読んだ 37 篇は、この世であまりにも不条理なことが起こっていて、それで怒りに燃えておかしくなってしまうところを、「そうではない、主を待ち望め」と自分に言い聞かせているダビデの言葉になっています。不条理に対する怒りや憎しみは、一度、心を支配するのを許してしまうと、パンドラの箱を開いたように増幅し、拡散し、取り返しもつかないようになります。

その中で、キリスト者は世から聖め別たれた者です。聖書では「聖徒」と呼ばれています。世には怒りと妬みがはびこっていますが、私たちはそれから別たれて、神の所有の民とされました。その秘訣を私たちは、37 篇 1-7 節から学ぶことができます。五つの格言があります。一つ目は 1 節の、「腹を立てるな。」ということです。二つ目は 3 節の、「善を行なえ」ということです。三つ目は 4 節、「主を己の喜びとせよ」であります。四つ目は 5 節、「あなたの道を主に委ねよ」であります。そして五つ目は 7 節、「主の前に静まれ」であります。

1A 「腹を立てるな」

37 ダビデによる 37:1 悪を行なう者に対して腹を立てるな。不正を行なう者に対してねたみを起こすな。37:2 彼らは草のようにたちまちおれ、青草のように枯れるのだ。

一つ目の「腹を立てるな」という戒めですが、これは怒りの感情で反応してはいけない、というこ

とではありません。怒りという感情そのものが間違っていることでは決してありません。神は悪に対して怒りを持っておられます。それは聖書の中で数多く出てくる、神のご性質です。そしてモーセもイスラエルの反抗心に対して怒りを抱きましたし、イエス様ご自身がパリサイ派の独善や偽善に対して、怒りと警戒を持っておられました。そうではなく、次の言葉が大事で「**ねたみを起こすな**」ということです。つまり、怒りという感情が出てきた時に祈ることを忘れて、そのままその怒りに自分を任せていくことを意味します。そうすると、自分が見えなくなります。ダビデは再び 8 節で、「**腹を立てるな。それはただ悪への道だ。**」と言っています。自分が怒っているまさにその原因を、自分が持つてしまうのです。

イスラエルの指導者ネヘミヤは、ユダヤ人が同胞のユダヤ人を奴隷として売っていることを聞きました。貧しいユダヤ人からの訴えの声を聞いて、「非常に怒った」とあります。けれども、「私は十分に考えたうえで、おもだった者たちや代表者たちを非難していった。(ネヘミヤ 5:6-7)」と続いています。その悪をはっきりと責めて、彼らがそれを捨てるように強い指導を与えました。使徒パウロは、アテネで「**偶像がいっぱいなを見て、心に憤りを感じた。**」とあります(使徒 17:16)。けれども、パウロはその怒りに任せて偶像破壊をせず、むしろ彼らが神に立ち返るように、熱心に福音を論じました。

私たちは、世の終わりに生きています。世の終わりは悪がはびこって、困難な時代であります。「**2テモテ 3:1-5 終わりの日には困難な時代がやって来ることをよく承知しておきなさい。そのときに人々は、自分を愛する者、金を愛する者、大言壮語する者、不遜な者、神をけがす者、両親に従わない者、感謝することを知らない者、汚れた者になり、情け知らずの者、和解しない者、そしめる者、節制のない者、粗暴な者、善を好まない者になり、裏切る者、向こう見ずな者、慢心する者、神よりも快樂を愛する者になり、見えるところは敬虔であっても、その実を否定する者になるからです。こういう人々を避けなさい。**」ここでのパウロの要点は、このような悪が神を全く知らない人々の社会ではなく、「**見えるところは敬虔**」とあるように、教会で敬虔を装っている人々の中で行われていくことです。

イエス様もこのことを予告されました。「**マタイ 24:11-12 また、にせ預言者が多く起こって、多くの人々を惑わします。不法がはびこるので、多くの人たちの愛は冷たくなります。**」信じている者たちの中で偽預言者がはびこるので、多くの人々が惑わされます。それで愛が冷たくなるのです。人々の心は頑なになっていきます。その頑なさを見ていると、愛をもって悔い改めと救いを執り成さなければいけない人々をも、怒ってしまいます。ヤコブとヨハネは、イエスを拒むサマリヤ人を見て、「**主よ。私たちが天から火を呼び下して、彼らを焼き滅ぼしましょうか。(ルカ 9:54)**」と言いました。

約束は 2 節、「**彼らは草のようにたちまちおれ、青草のように枯れるのだ。**」であります。不正や悪は、必ず過ぎ去ります。使徒パウロは、逸脱した教えについて、「**エペソ 4:14 それは、私たちがもはや、子どもではなくて、人の悪巧みや、人を欺く悪賢い策略により、教えの風に吹き回され**

たり、波にもてあそばれたりすることがなく、」と言いました。風であつたり、波であつたりするのです。ですから、過ぎ去ります。かつてキリスト教会を風靡していた流行していた偽りの教えは、既に下火になっています。そして異なる形でまた出てくるのですが、また下火になるのです。イエス様が言われたように、天と地は過ぎ去るけれども、イエス様の言葉は過ぎ去りません。

2A 「善を行なえ」

37:3 主に信頼して善を行なえ。地に住み、誠実を養え。

善を行なうとは、主から命じられていることを行なうことです。元々、これこれをしなさいと主に語られていて行なっていることに自信をもって、それを続けなさいということです。「主に信頼して」とあるように、目に見える形でその善の結果を見ることはできません。主が結果を生み出してくださいと信じて、それを行います。使徒パウロが、こう言いました。「ガラテヤ 6:9-10 善を行なうのに飽いてはいけません。失望せずにいれば、時期が来て、刈り取ることになります。ですから、私たちは、機会のあるたびに、すべての人に対して、特に信仰の家族の人たちに善を行ないましょう。」

ダビデがここで、「地に住み」と強調しています。日本語の表現にもあるように、「地に足を付けて」ということです。地味に見えても、忍耐強くしなさいと言われていたことを忠実にいきます。私たちは、絶えず敵の攪乱攻撃の的になっています。本当に大事なことはただ一つなのに、それを行なうことこそが主の御心であるのに、それに関わる他の事柄に気を逸らせる力が強く働いています。主に語りかけておられることに応答して物事を行なうのではなく、起こってくる事柄に表面的に反応しているだけのことがあります。主に対して応答しているのか、それともただ反応しているだけなのか、心の動機を確かめないといけません。

「誠実を養え」と、ダビデは勧めています。言い換えれば、「信仰を養いなさい」と言えるでしょう。「コロサイ 2:6-7 あなたがたは、このように主キリスト・イエスを受け入れたのですから、彼にあつて歩みなさい。キリストの中に根ざし、また建てられ、また、教えられたとおりの信仰を堅くし、あふれるばかり感謝しなさい。」多くの方が、礼拝前の新しい信者の学びに集われています。そこで、信仰についての基礎を学んでいます。そこから離れないことです。信仰に建て上げられることです。このことに集中しているのであれば、地に足を付けた生活を歩むことができます。

3A 「主を己の喜びとせよ」

37:4 主をおのれの喜びとせよ。主はあなたの心の願いをかなえてくださる。

これが三つ目の教え、格言です。「主をおのれの喜びとせよ。」は、英語では”Delight yourself in the Lord.”となっています。そのまま訳しますと、「あなた自身を主の中で喜ばせよ」となっています。主なる神以外のところで自分を喜ばせようとするのではなく、主ご自身の中に自分自身を置き、自分を喜ばせます。私たちは常に、周りの環境によって幸せや平穏を得させようと努力します。その

ことに常に多くのエネルギーが割かれています。しかし、そこには幸せはあっても喜びはありません。そして、その幸せも決して自分を満たすものではありません。幸せを求めようにも、そこには物足りなさがあり、それでこれを、あれをと求め歩くのです。

喜びは、周りの環境ではなく、主との関係の中によってのみ見出されます。主がどのような神であるのか、じっくりと見つめます。そして、そこから出てくる信仰を大切にして、喜びをしっかりと掴みます。自ずと、自分は神に祈ることでしょう。礼拝し、また賛美を歌いたくなるでしょう。そして、教会で兄弟姉妹と交わるようになるでしょう。「1ヨハネ 1:3-4 私たちの見たこと、聞いたことを、あなたがたにも伝えるのは、あなたがたも私たちと交わりを持つようになるためです。私たちの交わりとは、御父および御子イエス・キリストとの交わりです。私たちがこれらのことを書き送るのは、私たちの喜びが全きものとなるためです。」御父と御子との交わりがあり、その交わりをしている兄弟たちの交わりがあり、それで私たちの喜びが全きものとなります。

「キリストにあって”In Christ”という言葉ほど、偉大な言葉はありません。エペソ人の手紙 1 章によれば、「神はキリストにおいて、天にあるすべての霊的祝福をもって私たちを祝福してくださいました。」とあります。そして、キリストのうちに私たちを、世界の基が置かれる前から選んでおられました。しかも、それは神の前に聖く、傷のない者にしようとして選ばれたのです。そして、イエス・キリストによって神は私たちをご自分の子にしようと、愛をもって予め定めておられるのです。さらに、御子によって、その血による罪の赦しを受けています。そして神は、キリストにあって天にあるもの、地にあるもののすべてを一つに集めてくださいますが、その御国を神はキリストにあって私たちに受け継がせようとしておられるのです。その保証として、聖霊を私たちにキリストにあって与えてくださいました！

いかがですか、ペテロが言ったように、言葉に言い尽くすことのできない、栄えに満ちた喜びに満たされるではないでしょうか！ 外野は、ああだこうだと言ってやかましいのですが、私たちは主にあって自分自身を喜ばせようではありませんか。

そして約束があります。「主はあなたの心の願いをかなえてくださる。」とあります。ここも、英訳で読むとはっきりします。”He will give you the desires of your heart.”訳しますと、「あなたの心の願いを、神は与えてくださる。」となります。私たちは、自分の願いが神の御心に叶っているかどうか悩むことがありますね。まるで自分の願っていることが、神のそれとはいつも対立しているのではないかと、自信を持つことができないことがあります。その心配をしなくてもよい方法を教えます。それは、己を主の中で喜ばせることです。主こそ、自分の喜びだとしていることです。その生活をしていますと、いつの間にか具体的に、主が願っておられることが自分の心に置かれます。自分の願っていることが、いつの間にか神の願っていることと一つになっているようになります。

使徒パウロは言いました。「神は、みこころのままに、あなたがたのうちに働いて志を立てさせ、

事を行なわせてくださるのです。(ピリピ 2:13)」自分の志が、実は神からのもので、神の御心が働いているのです。

私たちの近代日本を支えた人物は何人もいますが、周辺に追いやられたけれども世の光、地の塩となった歴史があります。それは、明治以降にキリスト者です。日本で明治維新で活躍した有名人であれば、キリスト教宣教師の影響や接触を受けていない人を数えるほうが、難しいでしょう。しかし、その多くが表面的でした。洗礼は受けたものの、その後の生活は信仰とは関係ない人々もいました。

しかし、その中でも本気で信じた人々がいました。内村鑑三や新渡戸稲造です。どちらも中高の歴史教科書に登場する人物です。新渡戸稲造は五千元札にもなった人で、国際的に平和の架け橋になろうとした人でした。彼らが卒業したのが、北海道大学の前身である札幌農学校です。そこで教えていたのが、クラーク博士です。彼は、学生たちに「イエスを信じる者の誓約」というものに署名をさせ、キリスト信仰へと導きました。その第一期生との別れの時に、彼の言った有名な言葉は、「少年よ、大志を抱け。」であります。この言葉は、日本人の若者にやる気を与えることとなりますが、一説にはこう言ったとも言われているのです。「少年よ、キリストにあって大志を抱け。」キリストが抜けていれば、それは単に自分自身の志になり、自己実現の域を超えません。しかし、キリストにある大志であれば、キリストこそが自分の喜びであり、そこにある大志は地の塩となり、世の光となる力を持っているのです。

4A 「道を主に委ねよ」

37:5 あなたの道を主にゆだねよ。主に信頼せよ。主が成し遂げてくださる。37:6 主は、あなたの義を光のように、あなたのさばきを真昼のように輝かされる。

四つ目の格言は、「主に委ねる」ことです。ここでの委ねるという言葉は、「重荷を下ろす」という意味合いになっています。ですから、次の言葉が適切でしょう。「あなたがたの思い煩いを、いっさい神にゆだねなさい。神があなたがたのことを心配してくださるからです。(1ペテロ 5:7)」自分がだしている心配事を、主に持っていくことです。そうすれば、主が代わりに心配してくださいます。私たちは、ここで真面目であってはいけません。人に心配事を預けることは、無責任であるという教育を私たちは受けています。しかし、神に造られた目的以上に私たちが責任を負おうとすることは、自分を神と同じ位置に置くことになります。

イザヤ書には、バビロンの神々とイスラエルの神の違いを対比しているところがあります。バビロンの人々が、その町を離れて避難する時に、自分たちの偶像を家畜に載せて歩かねばなりません。それは文字通り、重荷となりました。けれどもイスラエルに対しては、「胎内にいるときからなわれており、生まれる前から運ばれた者よ。あなたが年をとっても、わたしは同じようにする。あなたがしらがになっても、わたしは背負う。わたしはそうしてきたのだ。なお、わたしは運ぼう。わ

たしは背負って、救い出そう。(46:3-4)「私たちはいつの間にか、神をあがめているようで、偶像に仕えているようなことはないでしょうか?「そんなことはありません! 一生懸命、クリスチャン生活をしようと努力しているのです!」けれども、自分が一生懸命、主にしがみついていることばかりを考えて、実は主がしっかりと自分を掴んでくださって、運ばせてくださっていることを忘れていませんか? 主がそれでも、自分を運ばせておられることを知りましょう。

私たちの前には、自分の道を神にゆだねた模範となる方がおられます。イエスご自身です。イエス様は、ゲッセマネの園で血したたる祈りを捧げられました。「できますならば、この杯を、わたしから過ぎ去らせてください。しかし、わたしの願うようにはなく、あなたのみこころにかなうように、なさってください。(マタイ 26:39)」イエス様は、この祈りを捧げて、その後で捕えられ、ユダヤ人に死刑だと叫ばれて、あざけられ、ローマ総督ピラトから実際に死刑宣告を受け、あの恐ろしい十字架刑に処せられました。しかしイエス様の心は平安だったのです。もうすでに父なる神に、ご自身の道を明け渡しておられました。肉体において、精神的にも、いや霊的にもイエス様は苛酷な体験をされましたが、その根底にはすべて父なる神の御手の中に自分を置いているという明け渡しがありました。だから、果敢に十字架に向かわれたのです。

そして、自分の道を主にゆだねると、「主が成し遂げてくださる。」が実現します。自分が成し遂げるのではなく、主が成し遂げてくださいます。多くの人が信仰によって始まって、それが主がすべてして下さったことを信じ、受け入れることであったのに、その後は天に向かうまで自分の努力次第だと思ってしまう。その過ちを犯したのがガラテヤにある教会です。パウロは叱責しました。「ただこれだけをあなたがたから聞いておきたい。あなたがたが御霊を受けたのは、律法を行なったからですか。それとも信仰をもって聞いたからですか。あなたがたはどこまで道理がわからないのですか。御霊で始まったあなたがたが、いま肉によって完成されるというのですか。(ガラテヤ 3:2-3)」御霊が完成してくださいます。

そして約束があります、「主は、あなたの義を光のように、あなたのさばきを真昼のように輝かされる。」この地上では、主に対して行なっていることの報いを見ないかもしれません。けれども、後の世でははっきりと報いてくださいます。先週ご紹介した、400メートル走で世界新記録を出したエリック・リデルの最期はまさにその人生でした。英国で金メダルを取っても、彼は次のオリンピックに出場せず、中国の宣教師になりました。そしてその最期は 43 歳で、中国の収容所で終戦直前に脳腫瘍で亡くなる場所で終わるのです。しかし、彼の義は真昼のように輝いているはずでした。使徒ペテロは、こう言いました。「1ペテロ 1:7 信仰の試練は、火を通して精練されてもなお朽ちて行く金よりも尊いのであって、イエス・キリストの現われのときに称赞と光栄と栄誉に至るものであることがわかります。」

5A 「主の前に静まれ」

そして最後の格言です。37:7 主の前に静まり、耐え忍んで主を待て。おのれの道の栄える者に

対して、悪意を遂げようとする人に対して、腹を立てるな。

「主の前に静まる」ということは最も単純な命令であり、最も守るのが難しい命令です。最も単純であるというのは、主が救ってくださるのだから何もしないということです。私たちは、しばしば道に迷った時に最もしてはいけないことをしますね。それは、道を探そうとして、さらに迷ってしまうことです。道を探せば探すほど、迷ってしまいます。けれども、迷ったところに留まっていれば、もしかしたら誰かが見つけてくれるかもしれません。山で路に迷う時は特にそうです。

けれども、私たちはそのまま、黙っていることが、なかなかできません。何かをしなければいけないではないか、と思ってしまう。ユダの国で、国が滅ぼされるという危機がありました。アッシリヤが攻めてきたのです。その時にヒゼキヤは、アッシリヤに対抗するためにエジプトと秘密裏に協力しました。ところがエジプトには、アッシリヤに対抗する力など全くありません。主は、ご自身がユダをアッシリヤから救うことを約束されたのに、黙っていられなくなってエジプトに助けを求めました。イザヤ書で、このように書かれています。「30:15-18 神である主、イスラエルの聖なる方は、こう仰せられる。「立ち返って静かにすれば、あなたがたは救われ、落ち着いて、信頼すれば、あなたがたは力を得る。」しかし、あなたがたは、これを望まなかった。あなたがたは言った。「いや、私たちは馬に乗って逃げよう。」それなら、あなたがたは逃げてみよ。「私たちは早馬に乗って。」それなら、あなたがたの追っ手はなお速い。ひとりのおどしによって千人が逃げ、五人のおどしによってあなたがたが逃げ、ついに、山の頂の旗ざお、丘の上の旗ぐらいしか残るまい。それゆえ、主はあなたがたに恵もうと待っておられ、あなたがたをあわれもうと立ち上がられる。主は正義の神であるからだ。幸いなことよ。主を待ち望むすべての者は。」主が助けてくださるのですから、しっかり待っていればよいのです。

そして、「耐え忍んで主を待て」の「待つ」の言葉は、痛みを伴った忍耐だそうです。「荒れ狂う、いたく苦しむ、痛みを覚える、産みの苦しみ、苦しみもだえる、もだえ苦しむ、傷を負う、待つ、待ち望む」ということ。出口が見えない、いつ救われるか分からない悶えの待ち望みであります。しかし、自分が主のうちに留まっていれば、主のところ立っていれば、自分の時は必ず来ます。主が正しい裁きを行なわれる時が必ず来ます。ダビデはサウルに追われましたが、サウルはペリシテ人によって死にました。アブシャロムによって王権が奪われましたが、間もなくしてエルサレムに戻ってくることができました。敵が裁かれていないことを見るのは辛いことです。しかし、痛みを伴いながら待ち望みます。自分の心が主の前に正しければ、自分の時を用意してくださっています。